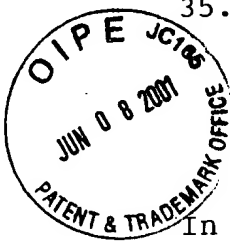


03CD #3



35.G2768

PATENT APPLICATION

IN THE UNITED STATES PATENT AND TRADEMARK OFFICE

Priority
doc
8/4/01
[Signature]

In re Application of:)
KOJI NOGUCHI, ET AL.) Examiner: Not Yet Assigned
Application No.: 09/826,894) Group Art Unit: N/Y/A
Filed: April 6, 2001)
For: LIQUID CRYSTAL DEVICE,)
LIQUID CRYSTAL DISPLAY)
DEVICE, AND DISPLAY)
PANEL) June 7, 2001

Commissioner for Patents
Washington, D.C. 20231

CLAIM TO PRIORITY

Sir:

Applicants hereby claim priority under the International Convention and all rights to which they are entitled under 35 U.S.C. § 119 based upon the following Japanese Priority Applications:

No. 2001-074089 filed March 15, 2001, and
No. 2000-112215 filed April 13, 2000.

A certified copy of each of the priority documents is enclosed.

The Examiner is respectfully requested to
acknowledge receipt of the claim to priority and priority
documents.

Applicants' undersigned attorney may be reached in
our New York office by telephone at (212) 218-2100. All
correspondence should continue to be directed to our below
listed address.

Respectfully submitted,


Attorney for Applicants

Registration No. 31865

FITZPATRICK, CELLA, HARPER & SCINTO
30 Rockefeller Plaza
New York, New York 10112-3801
Facsimile: (212) 218-2200

LSP\ac

NY_MAIN 175357 v 1



日 本 国 特 許 庁
JAPAN PATENT OFFICE

別紙添付の書類に記載されている事項は下記の出願書類に記載されている事項と同一であることを証明する。

This is to certify that the annexed is a true copy of the following application as filed with this Office

出 願 年 月 日

Date of Application:

2001年 3月15日

出 願 番 号

Application Number:

特願2001-074089

出 願 人

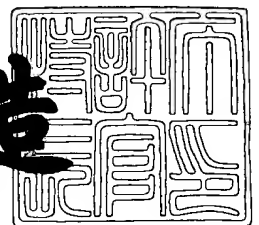
Applicant(s):

キヤノン株式会社

2001年 5月11日

特 許 庁 長 官
Commissioner,
Japan Patent Office

及 川 耕 造



【書類名】 特許願
【整理番号】 4423024
【提出日】 平成13年 3月15日
【あて先】 特許庁長官殿
【国際特許分類】 G02F 1/13
【発明の名称】 液晶素子および表示パネル
【請求項の数】 11
【発明者】

【住所又は居所】 東京都大田区下丸子3丁目30番2号キャノン株式会社
内

【氏名】 野口 幸治

【発明者】

【住所又は居所】 東京都大田区下丸子3丁目30番2号キャノン株式会社
内

【氏名】 棟方 博英

【発明者】

【住所又は居所】 東京都大田区下丸子3丁目30番2号キャノン株式会社
内

【氏名】 磯部 隆一郎

【特許出願人】

【識別番号】 000001007

【氏名又は名称】 キャノン株式会社

【代理人】

【識別番号】 100086287

【弁理士】

【氏名又は名称】 伊東 哲也

【選任した代理人】

【識別番号】 100103931

【弁理士】

【氏名又は名称】 関口 鶴彦

【先の出願に基づく優先権主張】

【出願番号】 特願2000-112215

【出願日】 平成12年 4月13日

【手数料の表示】

【予納台帳番号】 002048

【納付金額】 21,000円

【提出物件の目録】

【物件名】 明細書 1

【物件名】 図面 1

【物件名】 要約書 1

【包括委任状番号】 9703596

【プルーフの要否】 要

【書類名】 明細書

【発明の名称】 液晶素子および表示パネル

【特許請求の範囲】

【請求項 1】 2 枚の基板間にネマティック液晶を挟持してなり、上下基板の一軸配向性の方向が平行または反平行である液晶表示素子において、温度の変化に起因する前記液晶組成物の複屈折の変化を補償するように液晶分子の配向状態を変化させることで液晶表示素子のリタデーション値の温度変化を低減することを特徴とする液晶素子。

【請求項 2】 前記ネマティック液晶を主成分とする液晶組成物の 3 0℃での屈折率異方性が 0. 1 5 0 以上であり、かつ基板界面における 3 0℃での液晶分子のプレチルト角が 1 0° 以上 4 5° 以下であることを特徴とする請求項 1 に記載の液晶素子。

【請求項 3】 前記上下基板の配向は、一軸配向性を付与した、垂直または高いプレチルト角を有する有機系配向膜により設けたものであることを特徴とする請求項 1 または 2 に記載の液晶素子。

【請求項 4】 スイッチング素子を用いて駆動することを特徴とする請求項 1 ～ 3 に記載の液晶素子。

【請求項 5】 位相補償することにより黒を表示することを特徴とする請求項 1 ～ 4 に記載の液晶素子。

【請求項 6】 駆動電圧の高電圧側を黒とするノーマリーホワイトモードを使用することを特徴とする請求項 1 ～ 5 に記載の液晶素子。

【請求項 7】 2 枚の基板間にネマティック液晶を挟持してなり、上下基板の一軸配向性の方向が平行または反平行である液晶表示素子を複数配列した表示パネルにおいて、温度の変化に起因する前記液晶組成物の複屈折の変化を補償するように液晶分子の配向状態を変化させ液晶表示素子のリタデーション値の温度変化を低減することを特徴とする表示パネル。

【請求項 8】 前記液晶素子は液晶表示素子であることを特徴とする請求項 1 に記載の液晶素子。

【請求項 9】 前記液晶素子は電界制御複屈折型であることを特徴とする請

求項 1 に記載の液晶素子。

【請求項 1 0】 前記液晶素子はスプレイ配向型であることを特徴とする請求項 1 に記載の液晶素子。

【請求項 1 1】 前記液晶素子はベンド配向型であることを特徴とする請求項 1 に記載の液晶素子。

【発明の詳細な説明】

【 0 0 0 1 】

【発明の属する技術分野】

本発明は、ネマチック液晶を用いた液晶素子、液晶表示素子および該液晶表示素子を複数配列した表示パネルに関する。

【 0 0 0 2 】

【従来の技術】

従来より、ネマティック液晶の配向方式としては、液晶セルの上下基板のラビング方向を 90 度回転させた TN (Twisted Nematic) 配向素子が一般に使われているが、上下基板を反平行にラビング処理を行い上下二枚の電極基板間にネマティック液晶を挟む ECB (電界制御複屈折型) 方式や、同一方向にラビング処理を行った配向方式 (スプレイ配向) も昔から知られている。また、特に同一方向にラビングしたスプレイ配向に電圧を印加してベンド配向に配向変化させることで応答スピードを改善した方式が 1983 年に Bos らによって発表されている (π セル: 図 1 参照)。

【 0 0 0 3 】

このようなベンド配向セルに位相補償を行うことで視野角特性を改善した研究が 1992 年に内田等によって発表されている (OCB: Optically Compensated Birefringence セル)。図 2 にこのような OCB セルの代表的な構成を示す。同図において、71 および 75 は偏光子、72 および 73 は位相補償板、74 は液晶セルを示す。

【 0 0 0 4 】

このようなベンド配向型のネマティック液晶は、液晶の応答におけるバックフロー現象を抑制することによって応答性を改善、高速化したものである。

【 0 0 0 5 】

【発明が解決しようとする課題】

しかしながら、これら ECB、S p l a y および OCB モードを実際の表示素子として用いる場合にはいくつかの問題点がある。その一つに、液晶組成物の屈折率異方性（以下 Δn とする）の温度特性が原因で温度によりコントラストが最適温度に対して低下してしまう問題があった。

【 0 0 0 6 】

本発明は、このような従来技術の課題を解決し、液晶組成物の Δn の温度特性が原因で起こるコントラストの低下を低減し表示特性の優れた液晶表示素子および表示パネルを提供することを目的とする。

【 0 0 0 7 】

【課題を解決するための手段および作用】

よって本発明は、2枚の基板間にネマティック液晶組成物を挟持してなり、上下基板の一軸配向性の方向が平行または反平行である液晶表示素子および該液晶表示素子を複数配列した表示パネルにおいて、温度の変化に起因する液晶組成物の複屈折の変化を補償するように液晶分子の配向状態を変化させ液晶表示素子のリタデーション値の温度変化（温度に依存する変化）を低減することを特徴とする液晶表示素子および表示パネルを提供する。

【 0 0 0 8 】

具体的には、30℃での Δn が 0.150 以上であるネマティック液晶を主成分とする液晶組成物を用い、かつ基板界面における 30℃での液晶分子のプレチルト角が 10° 以上 45° 以下とすることにより、上記複屈折の変化を補償することができる。

【 0 0 0 9 】

本発明における上下基板の配向は、垂直または高いプレチルト角を有する有機系配向膜にラビング処理を施し、一軸配向性を付与させたものが好ましい。

【 0 0 1 0 】

本発明の液晶素子にスイッチング素子等を用いて駆動する際には、位相補償することにより黒を表示するものが好ましく、特に、駆動電圧の高電圧側を黒とす

るノーマリーホワイトモードを使用するものが好ましい。

【0011】

【発明の実施の形態】

本発明者等は、垂直またはプレチルトの高い有機系配向膜を上下基板を平行または反平行にラビング処理を行った液晶セルにネマティック液晶を挟持した場合に、液晶組成物の Δn の温度特性が相殺されるように配向状態が変化することを発見し、本発明を完成するに至った。一般的に液晶組成物の Δn の温度特性は、高温側では小さく低温になることで徐々に大きくなることが知られている。本実施形態で用いた液晶組成物の Δn の温度特性を図3に示す。

図3は、横軸に温度を、そして縦軸に屈折率異方性(Δn)をとり、液晶の Δn の温度変化を示すグラフである。図示するように液晶は、温度が低温側の場合 Δn が高く、一方高温側では Δn が低い。

そして、一般に液晶とよばれる化合物は、その種類のいかんにかかわらず、このような温度変化を示す。このような高温側で低下する Δn を補償するべく何らかの工夫をする必要があると本発明者等は検討した。

【0012】

ところで、この一般的な液晶組成物を垂直または非常に高いプレチルト角をもつ有機系配向膜にラビング処理を施した液晶セルに挟持させた場合、温度によってプレチルト角が可逆的に変化する現象を本発明者等は見出した。この現象の一例を図4に示す。

図4は、横軸に温度を、そして縦軸に液晶分子のプレチルト角を示すグラフである。図示するように液晶は、温度が低温側の場合高いプレチルト角を、一方、高温側では低いプレチルト角を示す。つまり、液晶組成物の Δn の小さくなる高温側ではプレチルト角が小さくなるようにして、液晶組成物の Δn の大きくなる低温側ではプレチルト角が高くなるようにすることで、液晶素子としてのリタレーション値の温度依存性が大幅に低減できることがわかった。

本実施形態および実施例では、ベンド配向する液晶素子を挙げて後述する。

図3を用いて一般的な液晶分子の Δn の値が温度によって異なることは前述した通りだが、液晶分子は、このような温度の違いにおいて分子自身の配向方向が

殆ど変化していない。ところが、温度が異なると、分子それぞれの Δn は異なる。リタデーション値(R)は、両基板方向における両基板に挟持された液晶の各分子の Δn の総和を意図するものであり、 $R = \Delta n d$ (d:液晶の厚さ)で定義される。本実施形態においてベンド配向型液晶素子を挙げるのは、ベンド配向型液晶素子において、このリタデーション値の制御が特に注目されるからである。これに対して、TN型液晶素子では、リタデーション値を意識して素子設計を行う必要がない。従って、本実施形態はTN型液晶素子に利用されるものではなく、リタデーション値の制御に注目する、例えば、スプレイ配向型、あるいはECB型の液晶素子にも好ましく用いられてよい。

なお、本実施形態では、液晶素子を表示素子として利用することを挙げて後述するが、液晶分子のスイッチング挙動を利用する他の技術、例えばライトバルブ機能を要する液晶素子に本発明の液晶素子を応用してもよい。

【0013】

本実施形態のように、温度によって変化する液晶の Δn を補償するように何らかの工夫、より具体的には、プレチルト角を温度に応じて変化させることで Δn を補償し、もってリタデーション値の温度変化を低減できる。

また本発明者等は、この液晶素子を表示素子として用いることを試みた。そして表示素子として用いる際、高いコントラストを得るために図2に示すように、位相補償板を用いる。

位相補償板は配向方向(一軸性を有する方向)に垂直となるように設けられている。このように位相補償板を配向方向を意識して設ける配向手法を用いることでリタデーションの変化を低減させるだけでなく、表示能力の変化、より具体的にはコントラストの温度変化を大幅に低減することがわかった。

さらには、液晶素子のプレチルト値を適正なものに設計することで、コントラストの変動を最適化できることがわかった。30℃でのプレチルト角を、10°以上とすることで30℃以下の温度でのリタデーション値の変動が大幅に低減できた。そしてこの場合、反射型等のディスプレイのように、室温付近(例えば30℃)から低温でのコントラストを出来るだけ一定にする必要があるものに用いることができる。さらには、30℃でのプレチルト角を30°以上とすることで

低温側から高温側までのリタレーション値の変動を大幅に低減できた。この場合、透過型のバックライトをもつ液晶ディスプレイに用いることができる。また、目的のプレチルト角を一定角度、例えばこの場合 45° より大きくすると配向変化の度合いが非常に大きく低温側でのリタレーション変動が大きくなり、コントラストを低下する原因となった。したがって、 45° 以下のプレチルト角で用いることが望ましいことが分かった。

さらに、本実施形態は Δn が 0.150 以上の液晶材料あるいは実用上他の物質と混合された液晶組成物を用いる場合非常に効果的である。というのも、液晶組成物の Δn の絶対値が大きいほど Δn の温度変化量は大きく、この変化によるコントラストの温度変化が顕著となるからである。

そこでこのように Δn の絶対値が大きい液晶材料あるいは液晶組成物を用いる場合本実施形態は好ましく用いられることを本発明者等は見出した。

【0014】

その見出した経緯をもう少し説明すると、 Δn の温度特性は、 30°C での Δn を基準として、通常、 10°C および 50°C へ温度が変化する事で約 $10\% \sim 20\%$ 変化した。なお、表示素子としてのコントラスト能力を比較したために便宜上 Δn の基準を 30°C における Δn の値とした。図 11 は、コントラストの温度変化（ 30°C におけるコントラストと 10°C におけるコントラストの差：以下コントラスト差と記す）と、液晶組成物の Δn との関係を示すグラフである。本実施形態による液晶素子の計測結果では、図 11 に示すように Δn がそれぞれ異なる液晶組成物のうち、 Δn が 0.140 以上特に 0.150 以上である液晶組成物を用いた液晶素子でコントラスト差が大きいことがわかり、 Δn が 0.150 以上の液晶の組成物を用いた場合本実施形態が有効であった。

なお、液晶組成物以外に単体の液晶材料を用いる場合も同様にある温度において、ある一定値を越える Δn 値を有する液晶材料を選択し、そのような液晶材料を本実施形態に用いることもできる。

【0015】

次に、本実施形態の液晶素子の 1 画素分の断面模式図を図 7 に、当該液晶素子を組み込んだディスプレイパネルの平面模式図を図 8 に示す。本液晶素子は、ス

イッチング素子としてTFTを用いたアクティブマトリクス型の液晶素子であり、図8に示すように、複数の画素電極30をマトリクス状に配置し、各画素電極30毎に配置したTFT37のゲート電極を走査信号線53に、ソース電極を情報信号線54にそれぞれマトリクス配線し、各走査信号線53には走査信号印加回路51より順次走査選択信号（TFT37のオン信号）を印加し、該走査選択信号と同期して情報信号印加回路52より所定の階調表示情報をもった情報信号を印加して選択されたラインの画素電極30に書き込み、所定の電圧を液晶層に印加して表示を行なう。

【0016】

図7において、20は基板、21はゲート電極、22はゲート絶縁膜、23は半導体層、24はオーミックコンタクト層、25はソース電極、26はドレイン電極、27は絶縁層、28はパッシベーション膜、29は保持容量電極、30は画素電極、31は水平配向膜、32は基板、33は共通電極、34は絶縁層、35は一軸性を付与させる配向層、37はTFT、38は液晶層である。

【0017】

図7の液晶素子において、透過型の場合には基板20には通常ガラスやプラスチック等の透明性を有する基板が用いられ、反射型の場合にはシリコン基板等の不透明な基板が用いられる場合もある。画素電極30および共通電極33は、透過型の場合にはいずれもITO等の透明導電材を例えば真空成膜法により150nm程度の厚みで成膜して用いる。反射型の液晶素子の場合には、画素電極30を反射性の高い金属で形成して反射板を兼ねる場合もある。半導体層23としては、一般にアモルファス（a-）Siが用いられ、例えば、水素希釈したモノシラン（ SiH_4 ）をグロー放電分解法（プラズマCVD）によって約300℃のガラス基板上に約200nmの厚みで堆積して用いる。その他、多結晶（p-）Siも好ましく用いられる。さらに、オーミックコンタクト層24としては、例えば、 n^+ a-Si層にリンをドーピングして用いる。ゲート絶縁膜22としては、窒化シリコン（ SiN_x ）が用いられ、例えば、グロー放電分解法により形成される。さらに、ゲート電極21、ソース電極25、ドレイン電極26、保持容量電極29、配線等には一般にAl等の金属が用いられる。保持容量電極29

については、面積が広い場合には、ITO等の透明導電材を用いる場合もある。絶縁層34には Ta_2O_5 等が用いられ、例えば真空成膜法により厚さ100nm程度に堆積する。さらに、絶縁層27およびパッシベーション膜28には窒化シリコン等の絶縁膜が好ましく用いられる。

【0018】

【実施例】

以下具体的な実施例を示すが、本発明はこれに限定されるものではない。

(実施例1～4および比較例1～2)

＜平行ラビングセルの作成＞

ITOを蒸着しパターニングしたガラス基板に、垂直配向膜用原液（製品名：JALS2022、JSR製）の所望の濃度の配向膜溶液をスピン塗布した。これを80℃で2分間プレ焼成し、200℃で60分間焼成した。これをコットン植毛布を用いてラビング処理を行った（ラビングローラ径：80mmφ、ローラ回転数：1000rpm、基板表面の押し込み：12mm、基板の送りスピード：10mm/s）。このように処理した電極基板に6ミクロンφのスペーサーおよびシール剤を介して上下基板のラビング方向が平行となるように、張り合わせるにより液晶セルを構成した。

【0019】

＜反平行ラビングセルの作成＞

ITOを蒸着しパターニングしたガラス基板に、垂直配向膜用原液（製品名：JALS2022、JSR製）の所望の濃度の配向膜溶液をスピン塗布した。これを80℃で2分間プレ焼成し、200℃で60分間焼成した。これをコットン植毛布を用いてラビング処理を行った（ラビングローラ径：80mmφ、ローラ回転数：1000rpm、基板表面の押し込み：1.2mm、基板の送りスピード：10mm/s）。このように処理した電極基板に6ミクロンφのスペーサーおよびシール剤を介して上下基板のラビング方向が反平行となるように、張り合わせるにより液晶セルを構成した。

上記作成したセルに、液晶組成物（製品名：CF-1783、セイミケミカル製）を減圧下室温で注入して液晶素子を作成した。

【 0 0 2 0 】

プレチルトは、配向膜溶液濃度を調整し配向膜厚を変化させることで最適化した。各配向膜厚と 3 0 ℃ におけるプレチルト角を表 1 および表 2 に示した。

【 0 0 2 1 】

＜セルの評価＞

（バンド状態に転移させるための前処理）

作成した平行セルに、1 0 V の電圧（1 例として 1 0 V、ただし 1 V ～ 1 0 V の範囲で電圧値変更可能）を印加して、スプレイ状態からバンド状態に転位させた。

（R 値と電圧との関係の測定）

このバンド状態で 6 0 H z 矩形波を印加しながら、ベレック式コンペンセーターを用いてリタデーション（R）値と電圧の関係の測定を行った。その一例（3 0 ℃ におけるプレチルト角を 3 0 ° とした例）を図 5 に示す。ここで、5 V 印加時のリタデーション（R）値に相当する位相補償板（5 V 印加時に完全に黒即ち不透明表示とする板）を用い、補償板の位相補償軸を液晶セルのラビング方向と直交させて配置し位相補償を行った。これを、直交した偏向子の上に挟みコントラストの評価を行った。この評価は、5 0 ℃、3 0 ℃ および 1 0 ℃ でのコントラスト（白の透過率／黒の透過率）を各々測定することで行った。結果を表 1 に示す。

【 0 0 2 2 】

【表 1】

プレチルト角とコントラストの温度変化の関係

	比較例 1	実施例 1	実施例 2	実施例 3	実施例 4	比較例 2
配向膜厚 (Å)	100	150	200	350	400	450
30℃プレチルト角 (°)	5	10	25	30	45	50
コントラスト変動						
50℃	40	100	130	150	100	80
30℃	150	150	150	150	100	80
10℃	25	150	150	150	80	40

【 0 0 2 3 】

表 1 から明らかなように、実施例 1 では、比較例 1 に対して低温（10℃）でのコントラスト変動が改善された。また、実施例 3 では実施例 1 と比較して高温側（50℃）でのコントラスト変動が改善された。比較例 2 は実施例 4 と比較して低温側でのコントラスト変動が発生した。

これらの実施例および比較例に対応する反平行セルを用いて温度によるプレチルト角変動をモニターした。結果を表 2 に示す。

【 0 0 2 4 】

【表 2】

プレチルト角の温度変化（反平行ラビングセル）

	比較例 1	実施例 1	実施例 2	実施例 3	実施例 4	比較例 2
配向膜厚 (Å)	100	150	200	350	400	450
30℃プレチルト角 (°)	5	10	25	30	45	50
プレチルト角変動						
50℃	5	9	22	26	40	46
30℃	5	10	25	30	45	50
10℃	6	12	28	36	51	56

【 0 0 2 5 】

比較例 1 と比較して実施例では、液晶の Δn の変動を補償するようにプレチルト角が変動していることがわかった。また、比較例 2 では、液晶素子のリタレーション値の温度変化以上に低温側（10℃）でプレチルト角変化をおこしてしまい、コントラストの低下が見られた。比較例 2 での平行セルかつベンド状態でのリタレーション値の変化を図 6 に示す。

さらに、実施例 3 については、ノーマリーブラックを意識し、低電圧側（1.2 V）で位相補償を行った。コントラスト変動は 50℃～10℃の間で、常に 80 であった。ちなみに他の実施例と比較例も同様の位相補償を行うとコントラスト変動は 50℃～10℃の間でそれぞれ変動を示さなかった。ただ実施例 3 は他の実施例より高コントラストをその温度範囲内で維持した。

【 0 0 2 6 】

<コントラストの温度変化と液晶組成物の Δn の関係>

CF-1783 およびチッソ株式会社製の液晶組成物（製品名：KN-5030）を表 3 に示す成分比（重量%）で混合した液晶組成物を作成し、30℃における Δn を計測した。結果を表 3 に示す。

【 0 0 2 7 】

【表 3】

液晶組成物の成分比と 30℃での Δn

組成物	A	B	C	D	E	F	G
KN-5030	90	80	70	60	50	40	20
CF-1783	10	20	30	40	50	60	80
30℃での Δn	0.13	0.14	0.15	0.16	0.17	0.18	0.19

【 0 0 2 8 】

これらの液晶組成物 A～G を、作成した実施例 3 の平行ラビングセルに注入して 30℃と 10℃のコントラストの温度変化を測定した。結果を図 11 に示す。液晶の駆動は、黒（不透明）状態を示すための 7 V と白（完全透明）状態を示す

ための 2 V のそれぞれの透過率を測定し両状態の差に基づくコントラストを測定した。図 1 1 によれば、 Δn が 0. 1 5 0 以上の液晶組成物で本発明の手法が有効であることがわかる。

【0 0 2 9】

(実施例 5)

<スイッチング素子を用いた液晶素子の評価>

図 7 に示すような T F T の構成を持つ基板を作成した。配向膜の作成条件は実施例 3 の条件で配向膜塗布時のみ印刷法で作成した。この基板に、図 8 に示すようにデータドライバーおよびゲートドライバーを実装した。これに図 9 に例示するような波形を印加することで液晶素子表示を行った。黒表示時（データ線に 7 V）と白表示時（データ線に 1 V）の電圧を印加することでコントラストの測定を行った。この結果コントラストは 5 0℃から 1 0℃まで 1 0 0 で一定であった。

【0 0 3 0】

(比較例 3, 4)

比較例 1, 2 の条件で配向膜印刷を行い、実施例 5 と同じ構成の T F T 基板それぞれ作成した。実施例 5 同様にコントラストを測定したところ、比較例 3 は 5 0℃では 1 0 0、3 0℃では 5 0、1 0℃では 2 0 となり、温度が異なるとコントラストが大きく異なる結果となった。なお、比較例 4 も比較例 3 と同様コントラストが温度によって大きく異なってしまった。

【0 0 3 1】

【発明の効果】

以上説明したように、液晶の Δn の温度特性を補償するように配向状態を温度によって変化させることにより、コントラストの温度変化をかなり軽減することができ、表示特性の優れた液晶素子を提供する事ができる。

【図面の簡単な説明】

【図 1】 スプレイ配向方式の π セルを示す模式的断面図である。

【図 2】 位相補償を行った O C B セルを示す模式的断面図である。

【図 3】 液晶組成物の Δn の温度特性を示すグラフである。

【図 4】 液晶組成物の温度によるプレチルト角変化を示すグラフである。

【図 5】 本発明の一実施例に係る液晶素子の電圧とリタデーションの特性を示すグラフである。

【図 6】 比較例 2 に係る液晶素子の電圧とリタデーションの特性を示すグラフである。

【図 7】 本発明の液晶素子の一実施形態の 1 画素分の断面模式図である。

【図 8】 図 7 の液晶表示素子を組み込んだディスプレイパネルの平面模式図である。

【図 9】 図 8 のドライバに印加する電圧波形の一例を示す図である。

【図 1 0】 液晶組成物のプレチルト角と、コントラストの温度変化との関係を示すグラフである。

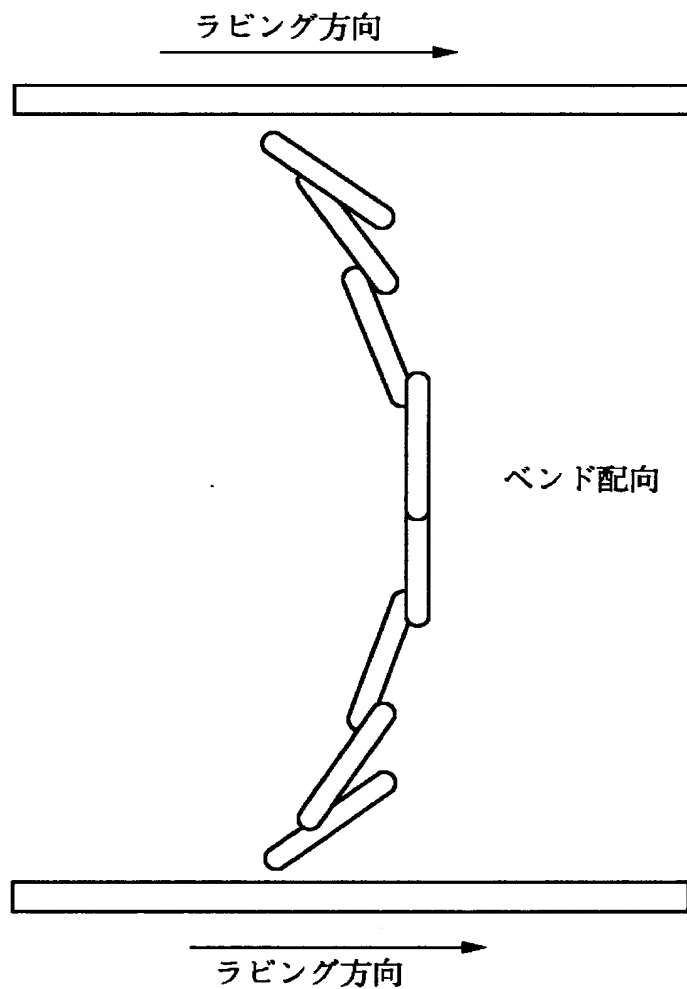
【図 1 1】 コントラストの温度変化と、液晶組成物の Δn との関係を示すグラフである。

【符号の説明】 20 : 基板、21 : ゲート電極、22 : ゲート絶縁膜、23 : 半導体層、24 : オーミックコンタクト層、25 : ソース電極、26 : ドレイン電極、27 : 絶縁層、28 : パッシベーション膜、29 : 保持容量電極、30 : 画素電極、31 : 水平配向膜、32 : 基板、33 : 共通電極、34 : 絶縁層、35 : 一軸性を付与させる配向層、37 : TFT、38 : 液晶層、53 : 走査信号線、54 : 情報信号線、51 : 走査信号印加回路、52 : 情報信号印加回路、71, 75 : 偏光子、72, 73 : 位相補償板、74 : 液晶セル。

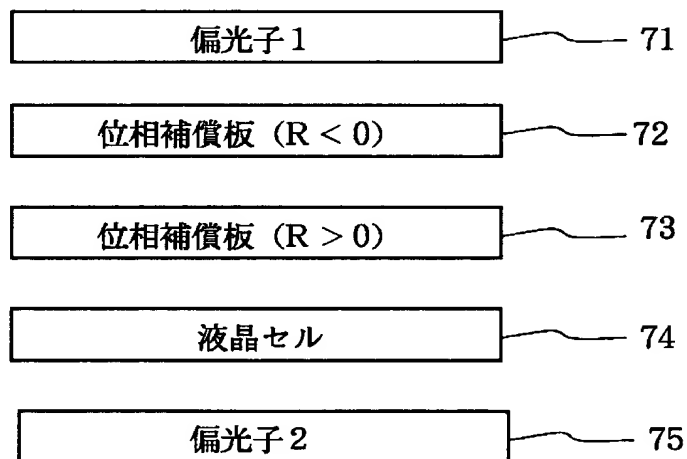
【書類名】

図面

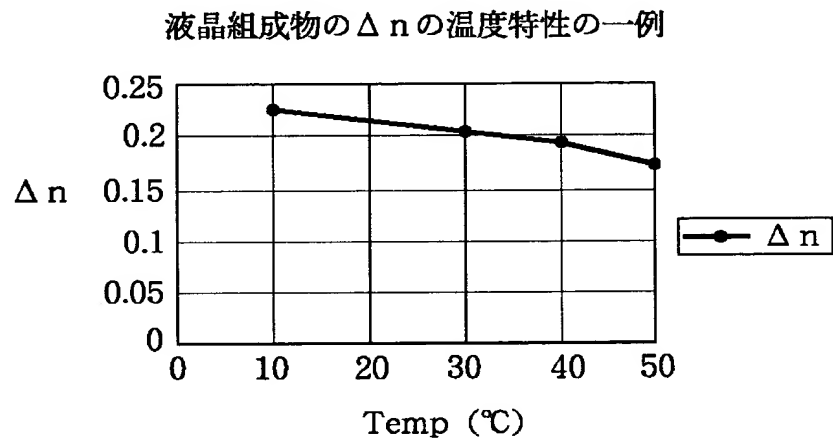
【図1】



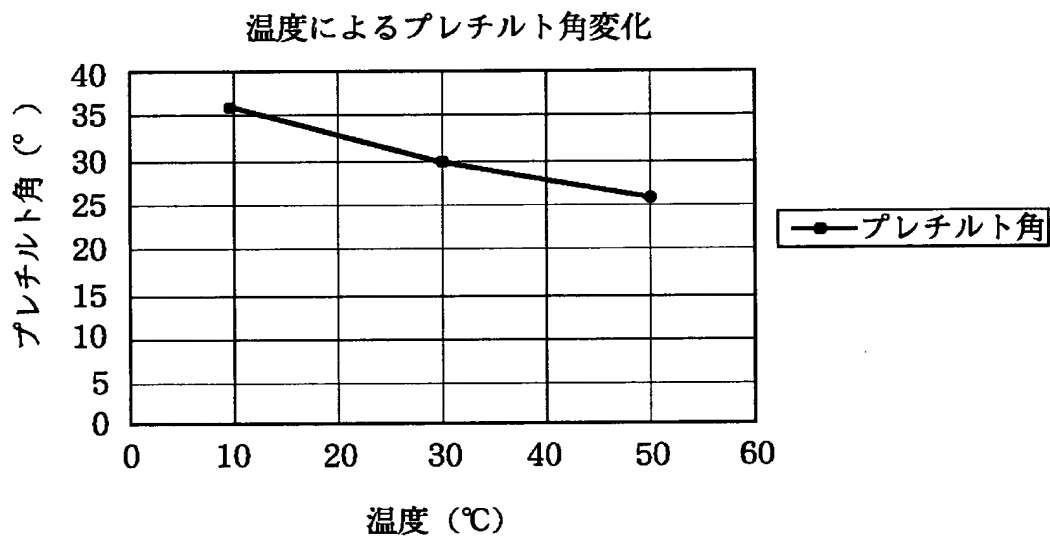
【図2】



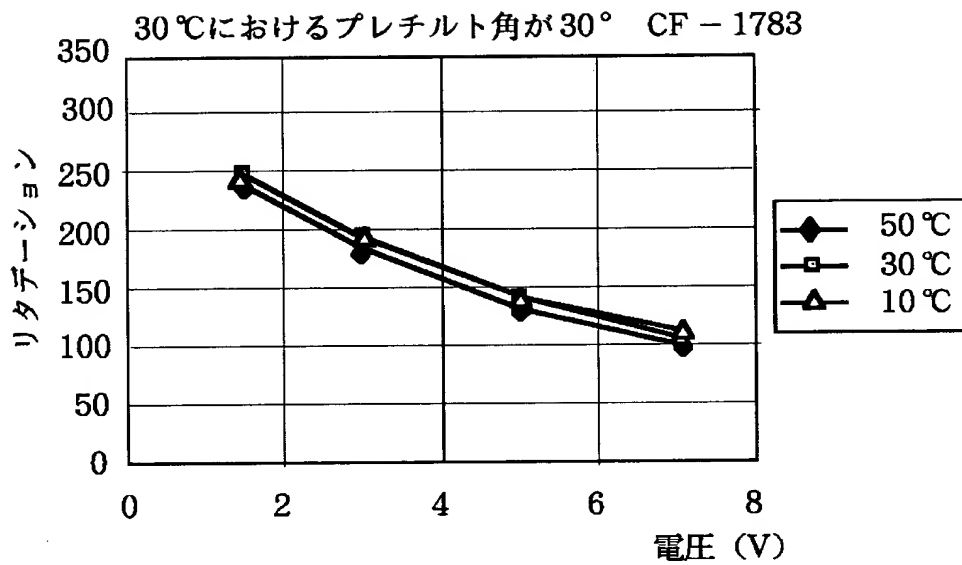
【図 3】



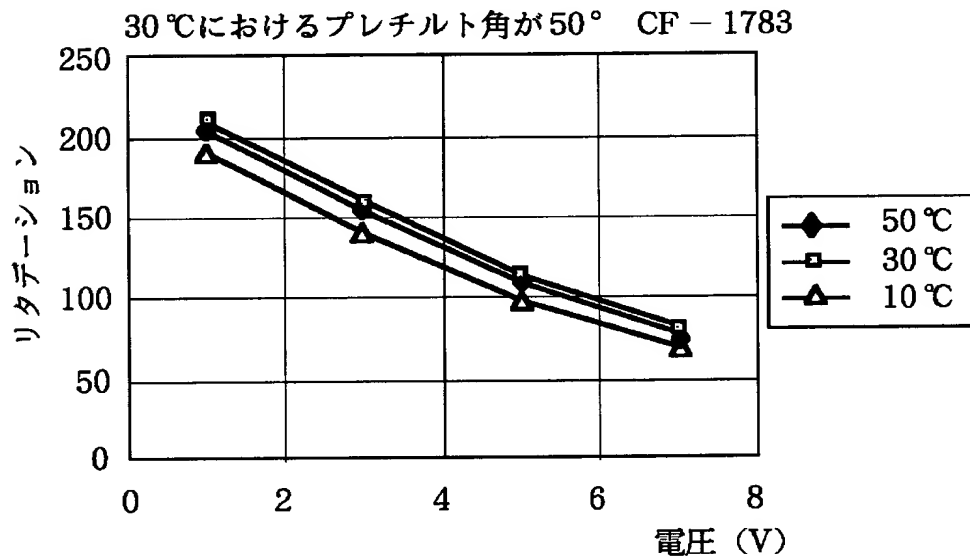
【図 4】



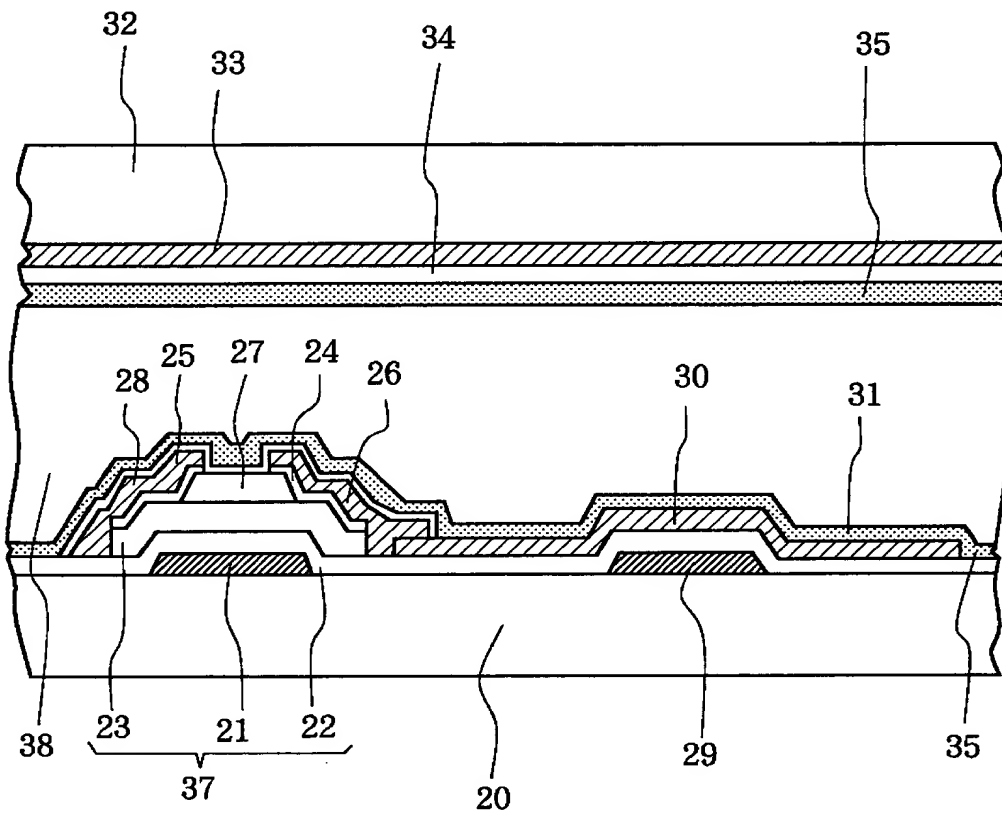
【図 5】



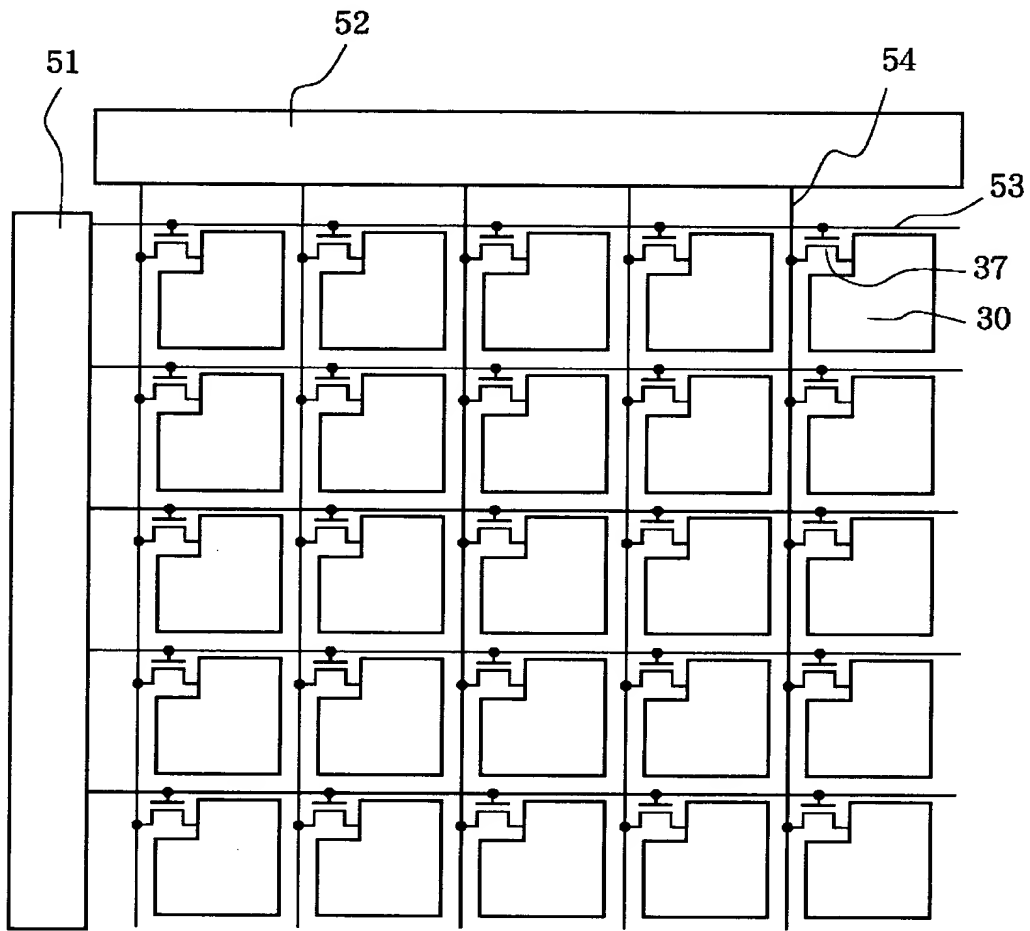
【図 6】



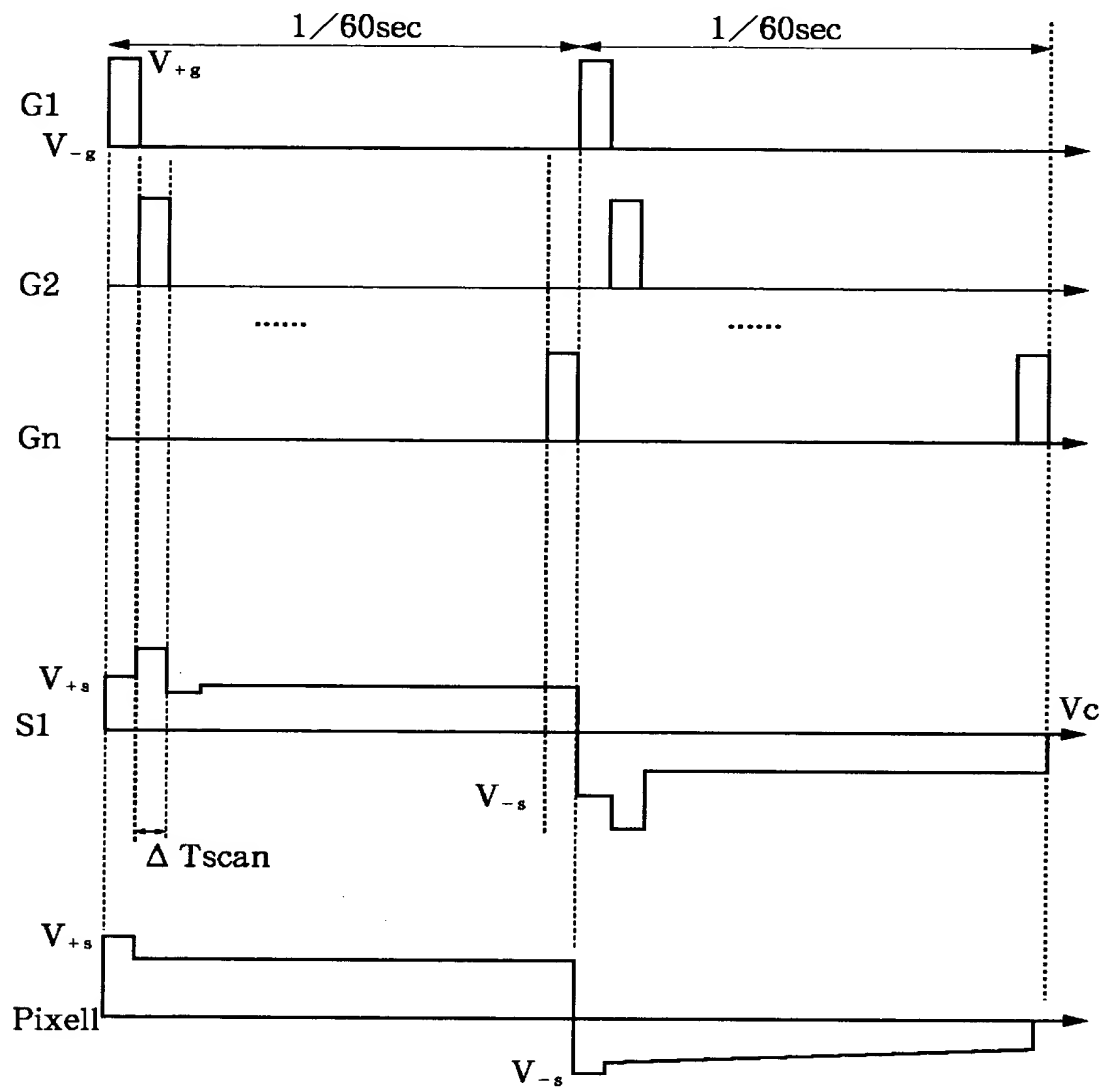
【図 7】



【図 8】

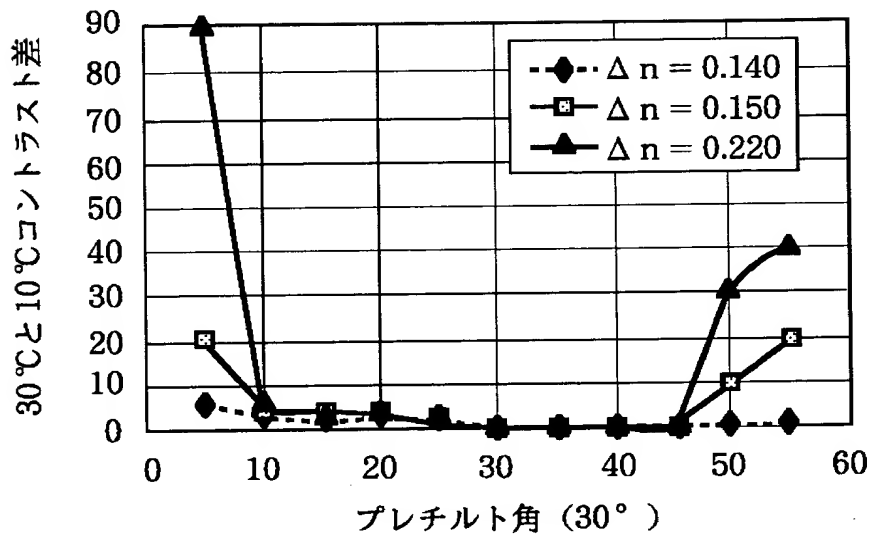


【図 9】



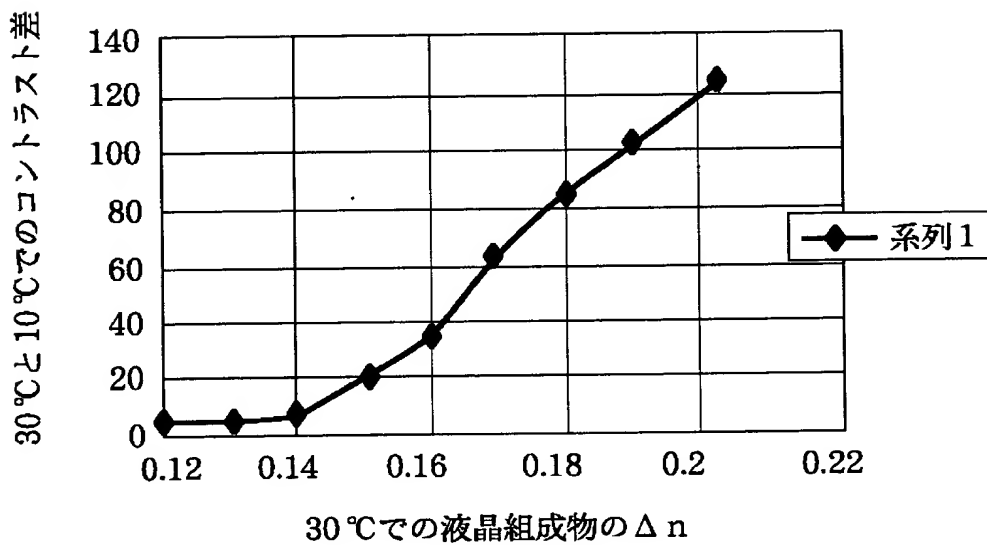
【図 10】

液晶組成物の Δn と 30℃ と 10℃ でのコントラスト差



【図 11】

30℃ と 10℃ でのコントラスト差



【書類名】 要約書

【要約】

【課題】 液晶組成物の Δn の温度特性が原因で起こるコントラストの低下を低減する。

【解決手段】 2枚の基板間にネマティック液晶を挟持してなり、上下基板の一軸配向性の方向が平行または反平行である液晶表示素子において、温度変化に起因する液晶組成物の複屈折の変化を補償するように液晶分子の配向状態を変化させ液晶素子のリタデーション値の温度変化を低減する。

【選択図】 図7

認定・付加情報

特許出願の番号	特願 2001-074089
受付番号	50100372055
書類名	特許願
担当官	第二担当上席 0091
作成日	平成13年 3月21日

<認定情報・付加情報>

【特許出願人】

【識別番号】	000001007
【住所又は居所】	東京都大田区下丸子3丁目30番2号
【氏名又は名称】	キヤノン株式会社

【代理人】

申請人

【識別番号】	100086287
【住所又は居所】	東京都港区虎ノ門2丁目8番1号 虎ノ門電気ビル 伊東内外特許事務所
【氏名又は名称】	伊東 哲也

【選任した代理人】

【識別番号】	100103931
【住所又は居所】	東京都港区虎ノ門2-8-1 虎ノ門電気ビル伊東内外特許事務所
【氏名又は名称】	関口 鶴彦

出 願 人 履 歴 情 報

識別番号 [000001007]

1. 変更年月日 1990年 8月30日
[変更理由] 新規登録
住 所 東京都大田区下丸子3丁目30番2号
氏 名 キヤノン株式会社